いったい全体、過去の音を聴くことは可能なのだろうか?想像をへて、精緻に織り込まれた知識を 駆使し、体感を通じた第六感を使い…? 唐突な問いかもしれないが、わたしはイーストヴィレッジ のコミュニティーガーデンにたたずみ、耳を澄ませてみることにした。

マンハッタンのイーストヴィレッジを散策すると、いたるところに「緑のオアシス」が散らばっている。 それらは「コミュニティーガーデン」と呼ばれ、市民の憩い場や子供の遊び場として、野菜やハーブ や花を栽培するガーデニングのために、アート作品やパフォーマンスを発表するスペースとして…、 様々な目的で使われている。DIY感覚で住民があるものを寄せ集めてできたガーデンもあれば、完 壁にデザインされた洒落たガーデンもある。何十人ものメンバーがミーティングを重ねて民主的に 物事を決めていくガーデンもあれば、ひとりのオーガナイザーが自らのビジョンで運営するケース もある。ひとつとして同じものはなく、どれも個性的な魅力をたずさえて…。だが、目的は違えど、 地域の住民が住民のために自主的に運営していることは共通している。

私がニューヨークに通い始めたのは、90年代半ばだった。ジェントリフィケーションの煽りを受け、 アーティストの多くが家賃の安いブルックリンに移り住む前、イーストヴィレッジを含むダウンタウンが 彼ら・彼女らの生活の場だった。ゆえに、いつもその辺りに常宿していた。今とは違い、アルファ ベットシティ(イーストヴィレッジのアヴェニューA~Dに跨がる地域)は治安の悪いことで知られていた。外を 歩く時は、周囲を気にかけ身の安全を確保する必要があった。だが、「ボヘミアンの街」の自由奔放 な気風が肌にあい、入り浸っていた。コミュニティーガーデンの存在に気づいたのもその頃、9丁目 とアヴェニューCの角にあるラ・プラザ・カルチュラルがお気に入りだった。70年代、バックミンスター・ フラーが貧困者の多い地域でオルターナティブな住宅供給を提起するために半球形の幾何学的な ドームを考案し、そのひとつがこのガーデンに設置されたり、ゴードン・マッタ・クラークらによってア ンフィシアター(野外円形劇場)のようなイベントスペースが作られたり・・・、数々の逸話はさておき、ガー デン自体は薄汚れていて何の気取りもなかった。だが、祝祭的空間の晴れやかさを感じた。それら の実験が、地元の活動家カルロス・チノ・ガルシアらが創設したCHARAS(地元のラテン系の住民を支援 する団体)によってオーガナイズされていたのを知ったのはずいぶん後のこと。建築やアートを礎に、 地域住民への啓蒙活動を推進していくアクティビズムがその根底にあった。ちなみに、この地域はチ ノ・ガルシアと詩人のビンボ・リバスによって「Loisaida(ロイサイダ)」と命名されたが、これはローワー イーストサイドをスペイン語と英語を混ぜこぜにして読んだもので、ラテン系の住民が自らの場所を 自ら名づけることにより、オートノミー(主体性)を獲得していく政治的な含みがあった。

この地域の呼称は、複雑な事情が背景にあるので簡単に説明しておきたい。かつて、イーストヴィ レッジは「ローワーイーストサイド」と呼ばれていた。だが、60年代、家賃の高騰によりグリニッジ ヴィレッジに住めなくなったアーティスト達が労働者階級の移民がほとんどだったこの地域に移り始 めた。「イーストヴィレッジ」という名は、すさんで犯罪の温床だったこの地域の悪印象を少しでもぬ ぐい去りたいという不動産業界の思惑のもとに名づけられた(ある種のジェトリフィケーションと言ってい い)。ゆえに、この地域の住民の多くは、彼ら・彼女らの住む場所をローワーイーストサイド/ロイサイ ダとずっと呼んできたし、現在でもそう呼んでいる。

話しが飛躍するが、15年以上前、あしげく通っていた2丁目とセカンド・アヴェニューの角にある実験 映画の殿堂アンソロジー・フィルム・アーカイブス(AFA)でジョナス・メカスから面白い話しを聞いた。 前衛映像作家のハリー・スミスは、文化人類学や民族音楽学にも精通し、オカルトにも造詣が深 かった。ダウンタウンの文化に深く関わった人物でもあった。80年代後半、ローワーイーストサイド の通りにたたずみ、聴こえてくる街のサウンドスケープをカセットテープに録音していった。ひとつ ひとつの通りで録音したカセットがあり、それらはアンソロジー・フィルム・アーカイブスの倉庫に 眠っている、と。メカスは、わたしがカセットレコーダーを用いたフィールドレコーディングをアートの 実践として行っていることも、スミスの芸術に興味を持っていることも知っていたので、こういう話に なったのだろう…。そこで、ふと思いついた。コミュニティーガーデンにたたずみ、聴こえてくる音を カセットテープに収めていってはどうだろうか? スミスの方法論を踏襲し、目に見える現実を超え て、その奥に広がる森羅万象に辿り着き、過去にその場で木霊していた音を聴取できないだろうか?

調べていくうちに色々とわかり始めた(まだ多くはベールに包まれているが…)。スミスのプロジェクトは、 Materials for the Study of Religion and Culture in the Lower East Side or Movie for Blind People(ローワーイーストサイドの宗教と文化の研究のための資料、もしくは盲人のための映画)』と呼ばれ、 彼の亡くなる前の最後のプロジェクトとしてニューヨークで始まり、コロラド州のボウルダーで継続 された。ハイチ人の露天市、バワリーでホームレスが咳き込んだりお祈りしたり、グレゴリー・コーソ やアレン・ギンズバーグの詩の朗読、トンプキンス・スクエア・パークの環境音、その他諸々のサウン ドスケープが含まれている。

このプロジェクトの舞台となるイーストヴィレッジのコミュニティーガーデンは、どのようにしてでき たのだろうか? この地域は、19世紀のイタリア人や東欧在住ユダヤ人、第二次世界対戦以降のフ エルトリコ人の流入など、昔から貧しい移民が住むスラムだった。70年代、ニューヨーク市は深刻 な財政危機を迎え、警察、清掃、消防局などを含む公共サービスを削減した。これらは低所得者の 多い地域を直撃し、荒廃の極みへ追いやる。多くの家主は、持ちビルを放棄して保険金目当てに放 火し始める。市は、家主の税金の不払いを理由にそれらの土地を差し押さえるが、何のケアも行わ ず放置したゆえ、ドラッグの取引が横行し、売春の牙城となり、違法のゴミ捨て場と化した。治安が 悪化し、犯罪が多発し、市民生活に甚大な影響を及ぼした。ホームレスの数は増え続け、野ネズミ も大量発生…。ほとんどコミュニティーガーデンは、このような状況を背景にして生まれてきた。 荒 れ果てた場所で、必要に駆られ、生活の改善を求め、希望を見出していくために…。

1973年、活動家リズ・クリスティーに率いられたボランティアの一団が、ハウストン通り沿いの空き 地に侵入、ガーデンを作り始める。自分達を「グリーン・ゲリラ」と呼び、他のガーデナー達に連帯を 呼びかけたり、植物の種や肥料を配ったり、アドバイスを与えたり、運動の輪を拡大していった。ク リスティーが優れていたのは、行政レベルでその運動を浸透させていったことだ。1974年、 Department of Housing Preservation and Development (HPD | NYC住宅保全開発局)に働きかけ、 月額1ドルで土地を使用する権利を獲得する。翌年、彼女はThe Council on the Environment of NYC (CENYC | NYC環境評議会)の傘下でオープン・スペース・グリーン・プログラムを開始。その後、 運動の拡大に伴い、ガーデンの数も増えていく。1978年、NYC住宅保全開発局でコミュニティー ガーデンを管理する団体GreenThumb(グリーンサム)が生まれ、市が所有する空き地でガーデンを 運営するグループに年間1ドルで土地を貸し出し始めた。それだけでなく、連邦政府から助成金を 得て、ガーデンニングのための土壌、肥料、種子、道具を提供したり、ガーデン作りのワークショッ プを始めたり(現在でも、多くのガーデンはグリーンサムからライセンスを得る形で継続している)。

だが、1994年、共和党のルドルフ・ジュリアーニが市長になり、市の財政赤字を埋めるために多く のコミュニティーガーデンを競売にかけることを発表。それらは建前上市の所有地なのだが、放置 されていた土地を住民達が自らの手で整備してきたのだ。ジェントリフィケーションで地価が上昇し た途端に取り上げ、再開発を行う悪どいやり方だった。ガーデン側は連帯して抗議活動を繰り広げ るが、いくつもガーデンがブルドーザーで破壊される羽目に…。 状況を憂慮し、 歌手のベット・ミド ラーが率いる都市の緑化計画を進める慈善団体New York Restoration Project (NYRP |ニュー ョーク・リストレーション・プロジェクト)と自然保護団体Trust For Public Land (TPL トラスト・フォー・パブ リック・ランド)が市内の112ヶ所のガーデンを存続させるために、それらの土地を購入する取引を市と 締結する。それにより、一部のガーデンは恒久的な権利を得たが、その他の多くのガーデンは短期 のライセンス契約を更新し続けなければならなかった。不動産の価値の変動にその存在を大きく左 右され、それらの未来は不透明なままである。

ともかく、話を元に戻すと、このプロジェクトをいざ開始しようという矢先にパンデミックが勃発し た。新型コロナウイルスの感染が世界中で拡大し、2020年3月の時点でニューヨークは最も被害が 甚大なエピセンター(中心地)となり、ロックダウン(都市封鎖)が始まる。イーストヴィレッジのコミュニ ティーガーデンもグリーンサムが当面の閉鎖を決定。メンバー以外の立ち入りは許されず、私自身 も立ち往生した。しかし、こういう特別な時分のコミュニティーガーデンの姿を記録しておくのも面 白いのではないかと、各ガーデンに直接コンタクトし始めた。5月以降、ジョージ・フロイドの死を きっかけに拡大したブラック・ライヴズ・マター(アフリカ系アメリカ人に対する暴力や構造的な人種差別の撤 廃を訴える運動、通称「BLM」)の抗議デモが全米に広まり、 ヴィレッジの通りが群衆であふれかえること も。 7月、各ガーデンが訪問者を迎え入れるかどうか判断を許されることになるが、 多くのガーデン はゲートを閉じたままだった。街路には浮浪者が増え、ロックダウンは徐々に解除されるが、経営に 破綻をきたしてシャッターを閉じた店舗が並び、不況の影が忍び寄る。ニューヨークのコロナ禍は夏 の時点である程度収束したが、11月の大統領選挙に向けて激しく揺れ動く政治状況も相まって人々 の不安は募るばかり。驚きに満ちた一年である。この状況下において、ガーデンの中で時を過ご し、ある種の安らぎを憶えた。人気の少ない野外空間なのでウイルスに感染する危険度が低いとい うだけでなく、荒廃した場所に「緑のオアイス」として出現した出自ゆえ、「安息の地」となり得るの

以下は、2020年4~8月、私がイーストヴィレッジ/ローワーイーストサイドのコミュニティーガーデ ンの中で行った耳と目の(もしかすると五感を越えた)探査の記録である。

1. リラクゼーション・ガーデン

Corner of Avenue B and East 13th Street 10年以上前、13丁目とアヴェニューBの角にあるこのガーデンの前を通り過ぎると、子供達が喜びそうな動物の モチーフや色とりどりのモービルがたくさん木に吊るされて、風に揺らめいていた。近所の住民が集う可愛らし いガーデンだった――。この夏、ふたたび通りかかると、真逆の風景が…。隣の敷地のビルの工事のため、一時 的に閉鎖されたガーデンは、野ネズミが大量発生、ゴミが大量に投げこまれ、数年前にはNYC Department of Parks and Recreation (NYC公園レクリエーション局)の職員が清掃作業を行ったが、いまだ荒れ放題…。以前はこ のコミュニティーガーデンのメンバーだったというラテン系の住民達が、フェンスの外の歩道でなにかを取り囲ん でいる。のぞいてみると、頭のちぎれた野ネズミの死骸が…。彼ら・彼女らいわく、「毎日夕方になると近所のト ンプキンズ・スクエア・パークに住む鷹の子供が飛来して、ネズミを漁るんだ。駆除してくれてありがたい」。どの ガーデンでもそうだが、メンバーの絶え間ないケアがあってこそ成立している。それがなくなれば、あっという間 に不毛の地に逆戻りしてしまうのだろう。

2. エル・ソル・ブリリアンテ

広々とした敷地によく手入れされた園芸用の花壇(「プロット」と呼ばれ、緑を木でおおい、土壌を入れ、一段高くしてあ る)がずらりと並んでいる。メンバーのひとりいわく、「(ロックダウンで)メンバーの多くはいつも以上に自由な時間 があり、ガーデンの管理や園芸により精を出している」。 他のメンバーは、「これまでに積み上げてきた長時間の 精根込めた労働が、この静謐なオアシスを作りあげた」と言う。散策していて感じるのだが、訪れた人をなごませ るオーラがある。それは、エル・ソル・ブリリアンテ(日本語で『輝き、照りつける太陽』)という名前からもうかがえる。こ のガーデンは、自然保護団体のトラスト・フォー・パブリック・ランドの助けを得て、メンバー達が土地の信託を手 に入れたニューヨークでも稀なケース。恒久の権利を得て、ガーデンを失う恐れはない・・・。だが、ジュリー・ダーマ ンスキーがデザインした切り絵のようなフェンスとゲートの外側、12丁目には、心をざわつかせるような景色が広 がっている。毎週土曜日、11丁目の慈善団体がフード・パントリー(生活の困った人に食料を無料で配布するサービス)を 施している。 それに並ぶ長蛇の列がアヴェニューBを通って12丁目まで延々とつづいているのだ。 居合わせたメン バー達も、ここまで長い列は見たことがない、と。なぜか中国人がほとんど。彼ら・彼女らの会話がガーデンの中 にまで響いてくる。パンデミックの時分ならではのサウンドスケープか。

3. カンポス・コミュニティーガーデン

640-644 East 12th Street

足を踏み入れると、ずらりと並んだ31個の園芸用の花壇が広い敷地の奥の方まで続いている。 夏野菜やハーブ が勢いよく茂り、花が咲き誇り…。このガーデンは日当りが良く、園芸に適しているのだ。真夏の太陽が照りつ



け、ジリジリと。 散水の水しぶきの音も。 それに、木に吊るされたウィンドチャイムが涼しげな音を奏で――。 リー ダー格のクリス・バテンホルストに話しを聞くと、「2004年、近所に住んでいたビバリー・マックレインが、毎日娘 の学校の送り向えに空き地の前を通っていた。以前はガーデンだったのに、荒れ地と化していた。ビバリーは他 のPTAのメンバー達と協力してふたたびこのガーデンを生き返えられせることにした」。以後、メンバーの数は増 え、出身地も様々で「多文化共生」。それに、イーストヴィレッジのガーデンには珍しく、家族でガーデングを行う割 合が高い。近所にプロジェクト(低所得者向けの公共住宅)が多いのも理由のひとつ。「そもそも、ヴィレッジはテナメ ント(移民や低賃金労働者たちが住んでいたひとつの階に複数のアパートが隣接する住宅)が多く、「家族」が多かった。でも、 ヴィレッジそのものが変わってしまった。もう、物価の安い地域じゃない。コンドミニウムや学生の寮も増え、住民 の職種も生活様式も変わった。コロナ禍のコミュニティーに対する影響を訊くと、「コロナがニューヨークを殺して しまった、もうこの都市は終わりだ、という人も多いけど、そうは思わない。不況になるだろうけど、それも悪くな いかも。年配の人たちは(極度の不況に見舞われた)70年代はずいぶんと面白かったという。かつてのように犯罪が はびこるのは嫌だけど、ディズニーランドのようなコーポレーションに毒された都市に住むのも御免被りたい・・・」。 いずれにせよ、パンデミックはこの世界にとって、それにこのコミュニティーにとっても、大きな転換期であること

4. イースト・サイド・アウトサイド・コミュニティーガーデン

ティーンエイジャー達がバスケットボールに興じる歓声やボールの跳ねる音がとなりのイースト・サイド・コミュニ ティー高等学校の校庭から響いてくる。だだっ広い敷地のガーデンでは、ガーデナー達が低木の茂みを刈る音 が。ロックダウンで街は静まりかえっているが、ここには幾らかのアクティビティーが――。メンバーのライアン・メ ンデンホールによると、いくつかの「コミュニティー」がこのガーデンを共有している、と。1992年から隣接する公 園も含めてオープンロード・パークと呼ばれていたが、2010年、理由はわからないがメンバーが去ってしまった (グリーンハウスと貨物のコンテナは当時のものだ…)。2015~16年、コンポストを行うグループが空き地だと思い拠点 を据えるが、となりのモスクのバングラディシュ人達がすでに野菜の栽培を行っていた(南アジア特有の大きなウリの 実がたわわに…)。 2016年、 コンポストを行うグループが、 近所の住民や高等学校の生徒や職員と一緒に「イース ト・サイド・アウトサイド」としてグリーンサムに再加入した。現在では、それらがパッチワークのように共存している という。ちなみに、昔はバスのターミナルとガレージだったので、入り口付近には当時のセメントの仕切り壁が残 されている。実に複雑な経緯をへて続いてきたようだが、それらの痕跡が一あからさまなものも微かなものまで一 ガーデン中に散らばっているのが面白い。

5. トヨタ・チルドレンズ・ラーニング・ガーデン

90年代後半、このガーデンの敷地は、慈善団体のニューヨーク・リストレーション・プロジェクトに購入され、2007 年、トヨタのサポートを得て建築家のマイケル・ヴォン・バルケンボーがデザインした。園芸とは無縁の憩いのため の場として機能し、周辺の他のガーデンとはずいぶん異なる。ゲートを閉めたままだったが、となりのビルに住む メンバーのマガリ・レジスが入れてくれる。風が吹くとサラサラと揺れる竹の植え込み、上空を横切る飛行機以外 音がしない。時が止まってしまったのか――。昔、となりのビルに住むプエルトリカンのご婦人が、鶏を飼ったり、 野菜を栽培したりしていたという。ビルの壁に蔓をはわせていたキーウィの樹(今は、お洒落なアルミ製の格子垣に移さ

れている)が唯一の名残りだと。入口付近には、ご婦人ご自慢の立派なバラの茂みがあったそうだ。すでに他界し た彼女の思い出に因んで、その場所には、マガリが植えたバラの木が茂っている。

6. ラ・プラザ・カルチュラル・デ・アルマンド・ペレズ・コミュニティーガーデン Corner of East 9th Street & Avenue C

ロックダウン中の5月、アヴェニューC沿いのフェンスに地元アーティストのロランド・ポリティが、リサイクルの廃 物を利用した彫刻群を飾り直していた。『Winter Flowers (冬の花々)』と名づけられ、使いふるしのアルミ缶や プラスティク・ボトルを切り抜いて派手に彩色した「花」らしき形状のブリコラージュで、200以上はあるだろうか。 2019年、このガーデンは古びてよれよれの針金のフェンスを取っ払い、新しい立派な鉄のフェンスを設置した。 この作品は20年前からあったのだが、工事中外されていたのが戻ってきたのだ。園内は静まりかえっているが、 フェンスの外側だけでも、色とりどりで楽しげな「花」が咲き、心を和ませる(特に、このコロナ禍の殺伐とした状況にお いては…)。ロランド・ポリティの作品は、あちらこちらのコミュニティーガーデンで見かける。ロイサイダのガーデン の歴史と結びついたアーティストだ。

7. 9丁目コミュニティーガーデン・パーク

イーストヴィレッジで最も大きなガーデンのひとつ。 早朝に園内を散策。 野菜やハーブや花を育てる20以上の園 芸用の花壇、金魚の放たれた池、いくつもの集会所、バーベキュー用のエリア、蜜蜂の巣箱が置かれた片隅、目 的の違う空間がオーガニックにアレンジされていて、それらを抜けるたび、異なる響きが耳に飛び込んでくる。だ が、アヴェニューCで道路工事の真っ最中。 時折、 ドリルでアスファルトをうがつ音がすべてをおおい尽くす――。 初めてこのガーデンを訪れたのは、20年以上前。ガーデン全体のデザインも、のびやかな雰囲気も、当時と変わ らない。ただ、大きな違いはこのガーデンのシンボルだった「しだれ柳の巨木」がないことだ。1977年、活動家の ふたり―リズ・クリスティーとチノ・ガルシア―によって植樹された。1979年にガーデンが誕生する前のことだ。瓦 礫におおわれた地面に根を張り、共に成長し、変遷のすべてを見守ってきた。なのに、2012年、ハリケーン・サン ディの引き起こした洪水で汚染したイーストリバーの水がガーデンに流れ込み、根を蝕み、枯れてしまい、数年後 に根元から切られてしまった。訪れてみて気づいたのだが、なんと小ぶりのしだれ柳が同じ場所に生えてきてい る。メンバーに訊いてみると、「新しい木が地面の下の古い根っこから生えてきた」と言う。輪廻転生、半世紀後、 あのような巨木となるのか。

深夜、街のノイズが寝静まってからガーデンに戻り、ふたたび耳をそばだてる。周囲のビルの照らし出す街明かりを たよりに歩き回ると、幾千の昆虫たちの大合唱。しだれ柳の下に立つと、垂れ下がった葉を風が揺さぶる音が耳を

8. フラワー・ドア・ガーデン

近所に住むプエルトリカンのサントス・マトスがゴミだらけの空き地を片付け、このガーデンは始まった。未だ友

人の手助けを得ながら、ひとりで切り盛りしている。アヴェニューC沿いのカラフルに彩色されたゲートの中、葡萄 棚に垂れ下がる果実をハサミで摘む音、巨大な鳥篭に入れられた白い伝書鳩がバタバタと羽ばたき、サントスが 来客と話す大きな声が敷地の双方を挟む壁にエコーする。「70~80年代、この辺りはずいぶんイカれてた。でも、 コミュニティーの絆が強く、家族みたいなもので、皆顔見知りだった。悪さをしようものなら、すぐに知れ渡ってし まう」。眼と鼻の先にあるラ・プラザ・カルチュラルや9丁目コミュニティーガーデンのように、大所帯ですべてが民 主的にオーガナイズされているガーデンもある。はたまた、このガーデンはサントスのための小宇宙、彼を軸にし て回転する。ガーデンといえども千差万別である。

9. デ・コロレス・コミュニティーヤード&カルチュラルセンター 311 East 8th Street

90年代後半、ブルドーザーが唸りを上げる音がこの地域のコミュニティーガーデンからよく聴こえてきた。 ジュリ アーニの市政下で、多くのガーデンは開発の手先に委ねられ、退去通知を受けた。8丁目のABCガーデンのメン バーだったエリザベス・ルフ・マルドナドが話すところによると、「1996年1月のある朝、シャワーを浴びていたら、 ABCガーデンからブルドザーの騒音がブルブルと伝わってきた。服を着て外に出ると、50家族分の園芸用の花 壇や果物の樹々がぺしゃんこに踏みつぶされていた。市は老人ホームを建てるためと言い訳したけれど、空き地 なら他にもいくらでもあった。低所得者用の住居かガーデンかを選択させ、反対運動の結束に亀裂をもたらし、コ ミュニティーを分断させる手口だった。ガーデナー達はそれを見抜いていたし、ジュリーニはわたし達を追い出し たいだけだった。 8丁目の通りの向いでは、白いバラの茂みを育てていたキャロル、野菜を栽培していたキュバ、 へさきにバラクーダの歯が描かれたオレンジ色のボートを保管していたラルフらの使っている場所があり、イチゴ の茂みが繁殖していた。春までに、ABCを失ったメンバーの数人が、そこで新たなガーデンを整備し始めた。わ たしは娘を身籠もっていたけれど、重い瓦礫を運んでダンプスター(巨大なゴミ溜)に投げ込んでいった。かなりの 数の注射器が散乱していて、目も当てられない有り様だった。わたし達は電気会社が工事中に掘り出して道沿い に放置していた土でガーデンの真ん中辺りをおおって芝を植え、5月には根をはっていた。それが、『コミュニティー ヤード(コミュニティーの庭)』の始まりだった。『デ・コロレス』というのは人気のあったスペイン語の歌にちなんで名 づけた」。市がこの敷地をオークションにかけて売ろうとしていたため、法的な権利が危うい状態だった。ガーデ ナー達は地域のコミュニティーの委員会の承認を受け、NYC Department of City Planning (DCP | NYC都市計 画局)で証言して、そこが推薦してくれて、グリーンサムのライセンスを得ることができた。それ以来、コンサート、 政治集会、結婚式、ヨガのクラスなど、あらゆる類のイベントが行われてきた。だが、必ずしも意図した訳ではな く結果的にそうなったのだ、と。「私達のアパートは子供と一緒に住むには小さ過ぎて、ガーデンはリビングルー ムの延長みたいなもの。冬は雪だるまを作ったり、暖かいサイダーを飲むためにここにきた。夏なら本を読んだ り、音楽を演奏したり」。テナメントの多いロイサイダの住宅事情からして頷ける話だ。ガーデンは、普段の生活の ニーズを賄うための空間でもある。

10. ラ・カシータ・ガーデン 339 East 8th Street

コロナ感染の拡大を避けるため、イーストヴィレッジのほとんどのコミュニティーガーデンはグリーンサムの決定 に従い閉鎖されたままだ。だが、メンバーは入園を許されているので、植物の世話をしたり、掃除をたり――。8 丁目のラ・カシータは、ゲートが開いたままだ。マスクをしたふたりのプエルトリカンの中年のおやじがスペイン語 でなにやら話し込んでいる。地面には園芸用の花壇が並べられ、植えられたばかりの植物の苗が若芽を吹き始 め――。農具を収めた深みどりのほったて小屋があり、その壁にはふたつの大きな額縁に収められた近隣のプエ ルトリカンの住人の記念写真が無造作にコラージュされている。レストラン、自宅、公園、海水浴場での家族や友 人との交歓がつづられている。極端な色の褪せ具合からして、少なくとも20~30年はここに貼られていたのだろ う――。このガーデンの前の通りは 普段から車通りも人通りもまばら。そのうえロックダウン、過度の静けさに包

11. ファイアマンズ・メモリアル・ガーデン

E 14th St

ようやく春めいてきた5月半ば、すでに緑が青々と茂り、よく手入れされている。 芝生を囲んで円形の花壇と遊歩 道があり(かつてアダム・パープルがつくった伝説的ガーデン「エデンの園」にインスパイアされたと…)、白髪混じりの中年男 性とガーデンの運営を任されているという若い女性が苗を植えたり、芝を刈ったり。入っていいか、と訊くと、好 きにして、と。鳥がさえずり、仔犬が走り回り、シャベルで土を掘り返す音が…。コロナの感染者と死者は増加の 一途、極度に緊迫した外界に反して、眼耳にのどかな風景が広がる――。「消防士マーティン・セリック NYC消 防局記念公園」と彫り込まれた大きな立て看板がある。このガーデンは、殉職した消防士たちに捧げられ、ロー ワーイーストサイドの消防署で働いていたマーティン・セリックという若い隊員の思い出に因んで名づけけられた。 1977年、ここにあった誰も住まなくなったアパートが放火された。炎は一瞬にして燃え広がり、作業に当たった 消防士たちは五階に閉じ込められ、ビルの外側に備え付けられた非常階段へ逃れ、クレーンに拾われて命拾い した。だが、セリックだけは足を踏み外し、地面に叩きつけられ、その八日後に病院で息を引き取った。ビルは焼 け落ち、隣接した土地でガーデニングをしていた住人がこの敷地までガーデンを広げることに――。中年の男は、 「無数の崩れ落ちたレンガが地面の下に眠っているんだ。掘り下げるといくらでも出てくる。 花壇をつくるのにつ かっている」。他の多くのガーデンもそうなのだが、空中庭園のように焼け落ちた瓦礫の上に浮かんでいるのだ。

12. グリーン・アオシス・ガーデン

370 Fast 8th Street

雨音がさめざめと響く中、濡れた落ち葉を踏みながらガーデンの一部を成す「ギルバートの彫刻の庭」を散策す る。となりのビルに住んでいたギルバート・イングラムの木彫や石彫の作品が忘れ去られたように散らばってい る。このガーデンのシンボル、赤く塗られた六角形の東屋では、CSA(地域支援型農業の団体)とLUNGS(ロイサイダ・ ユナイテッド・ネイバーフィッド・ガーデンズというこの地域のコミュニティーガーデンをサポートする団体)が有機野菜の配布を 行っていて、近隣の住人が次々に現れ、世間話に興じた後、10ドルでバッグ一杯の野菜を持ち帰っていく――。 1981年、創始者のノーマン・バレが、彼のパートナーのレイナルド・アリネスと瓦礫に埋もれていた空き地を片付 け、近所の子供達が安全に遊べて、アーティストやパフォーマーが作品を発表できる環境を整備し始めた。ステー ジがあり、レイナルドが子供達のための演劇を披露することもあった。結婚式からプエルトリカン達の聖十字架発 見の記念日の儀式まで、近所の住人達のイベントが行われていたという。ノーマンとレイナルドはエイズ感染で命 を落としたが、彼らの遺灰はこのガーデンの敷地に蒔かれた。スピリットは生き延びている。

13. カルメン・パボン・デル・アマニセラ・ガーデン 115 Avenue C

コミュニティーガーデン運動を含む都市のアクティビズムを推進するミュージアム・オブ・リクレイムド・アーバン・ スペース(MoRUS)とTime's UP!で企画した「Green-Up Day(緑の清掃日)」が行われている。 ボランティアを集 めて、ガーデンの整備を行うのだ。MoRUSの創始者の一人ビル・ディパオロが指示し、10人かそこらの若い学 生連中が、花壇の土を入れ替えたり、伸び放題の花や樹木を剪定したり、ホースで水をやったり…。 ロックダウ ン中は閉鎖されていたので、ようやく活気のあるサウンドスケープが戻ってきた。ビルは、「この中からひとりか ふたりでも我々の活動に興味を持って続けてくれたらしめたものだし、と。コミュニティーガーデンの運動の中枢に いるオーガナイザー達は高齢化が進んでいる。次の世代への橋渡しを考えると、若い世代に働きかける機会は必 要だろう——。ゲートを入ってすぐ左、1984年に作られた浮き彫りの壁画は『One Generation to Another La Lucha Continua(世代を超えて戦いは続く)』と題され、ロイサイダの地図を背景にアフリカン・アメリカンかプエル トリカンと見受けられる子供ふたりが手を取り合いながら進んで行く姿が描かれている。70年代からの運動の立 役者のひとり、プエルトリコ移民のカルメン・パボンがこのガーデンを始めたのだが、90年代後半にはジュリアー ニが市長の時に敷地の2/3を不動産開発業者に売られ、その後17年間はそのビルの工事のために閉鎖されるな ど、幾多の多難を乗り越えてきた。2016年、カルメンは94歳で亡くなるが、「ロイサイダの母」として親しまれた 彼女の伝説はこの壁画とともにある。

追記:皮肉なことだが、2016年、このガーデンはドナルド・カポーシャによって再オープンされた。この男は悪名 高き不動産開発業者で、90年代後半にいくつものガーデンを破壊し、カルメン・パボン・ガーデンの一部も接収し てビルを建てた。再オープンの記念セレモニーで、「心を入れ換え、これからはコミュニティーガーデンをサポート していく。これは、私にとっての罪滅ぼしのリハビリテーションの始まりだ」、と語った。もしかすると改心したのか もしれないが、ガーデンが彼の経済的な収益に結びついていることを考慮すると、額面通りには取れない。

14. ローワー・イースト・サイド・エコロジー・センター・コミュニティーガーデン

210 East 7th Street

7丁目沿いのガーデンの前、コンポストのための生ゴミを持ち寄る「ドロップ・オフ・サイト」が設けられている。こ のプログラムの創始者クリスティーン・ダッツ・ロメロとスタッフが待ちうけ、5分置きぐらいに近所の住人がビニー ル袋に入った生ゴミを手に現れ、置いてある大きなバケツに放り込んでいく。多くは顔見知り、随分話し込んでい く人も。彼ら・彼女らの会話が、日曜の朝のアンビエンスに溶け込んでいく――。 1980年、ドイツからニューヨー クに移住したクリスティーンは、「リサイクル」の可能性にいち早く着目し、1990年、この土地を市から月額150 ドルで借り受ける。 当初はここでコンポストを行い、 生ゴミから堆肥を作っていた。 そのうちドロップ・オフ・サイト も増え、あるインタビューで語ったところによると、「ローワーイーストサイド・エコロジー・センター(LESEC)は、コ ンポストによる土壌の改善を通じて、瓦礫だらけの荒れ地を緑のオアシスに変貌させていった。地域の住民が手 応えを感じ、コンポストの活動に参加する意義を理解し、ありがたく思うようになった」と語っている。だが、活動 の拡大に伴い、ここでは手狭になった。1998年、LESECはイースト・リバー・パークの広大な敷地に拠点を移す。 それ以降、ガーデンは使われなくなっていくが、彼女は「コンポストのシステムを作り上げ、『廃棄物』をコミュニ ティーの『資産』に変えていく上で、生き生きとしたシンボルとして残り続けている」、と――。 ガーデンに入りこん で、耳を澄ます。シンボルゆえの閑寂。奥の方に黒く塗られたほったて小屋があり、昔行われていたジャズ・コン サートやご近所の集まりの写真がたくさん貼られている。過去に眼を凝らすと、かつてここで奏でられていた音が 聴こえてくるような気がする。

15. サム &サディ・ケーニッグ・ガーデン

霧雨の早朝、古参のメンバーのキャシー・コードがゲートを開けてくれ、茶色の土の上に敷かれた白い砂利道に 踏み込むと、石の擦れる音がする。まず眼に飛び込んでくるのは同じブロックの住人だったアーティスト、キキ・ス ミスの直立した少女のブロンズの彫刻作品だ。『The Garden(庭)』と題され、足首から下は地中に埋もれ、そこ から生えてきたような。凍りついた存在感が、物いわぬ寡黙さが、ガーデンの空間を支配している。その他いくつ ものメンバーのアート作品が、地面や壁に設置され、さながら屋外ギャラリー。しばらく静けさに耳を澄ませている と、敷地の奥にもうひとつの敷地があることに気づく。入り込むと、綺麗に整備された通り沿いの敷地とは違い、 剥き出しのフェンスに囲まれ、雑草が生い茂り、荒れた印象の猫の額ほどの空間が。ここにもいくつものアート ワークがある――。7丁目のアヴェニューCとDに挟まれたこのブロックはかつて「Political Row(ポリティカル通り)」 と呼ばれ、政治家が多く住んでいた(ヴィレッジでは珍しく、昔ながらの作りの豪華なビルがいくつも…)。となりのビルに 住んでいたサム・ケーニッグ(州政府の国務長官を務めたこともある)とその妻のサディに因んで名づけられたこのガー デンは謎が多く、正確にいつ始まったのかわかっていない。しばらく忘れられていたのを、1984年にキャシーが 他のメンバーたちと再生させ、そこからも紆余曲折があったそうだが、近所の顔見知り連中が助け合い、ケアして きたのは確かだろう。

16. 6丁目&アベニューB・コミュニティーガーデン

Corner of East 6th Street and Avenue B 茹だるような暑さの真夏日和、ガーデンのゲートをくぐると、数人のメンバーが植物の手入れをしている。表通り のアヴェニューBは、ロックダウン以降人通りが減少、車の通行も一部せき止められ、外から流れ込んでくる「街 の喧騒」は控えめ。その分、ガーデン内部の微細な音が聴こえる――。かつて、このガーデンには聳え立つタワー があった。1985年、5丁目に住んでいたペンキ塗り職人のエディ・ボロスは、ガーデンの自分の園芸用の花壇に かき集めてきた廃材を組み上げて、難破した船のようなバラックのタワーを作り始めた。年を経るごとに高度を増 し、周囲のビルと背を並べ、20メートルまで上昇。ぬいぐるみや、マネキンや、張りぼての馬や、拾ってきた雑多 なオブジェがいたるところに吊り下げられ…。わたしは90年代後半からニューヨークを頻繁に訪れはじめたのだ が、いつもイーストヴィレッジで過ごしていた。『Tower of Toys(おもちゃのタワー)』は目立つので見逃すわけは なく、通りすがりに立ち止まって見上げていた。雨晒しで薄汚れ、異様なアウトサイダー・アートのようなオーラを 放つ…。ロスアンジェルスにあるサイモン・ロディアが33年の歳月を費やして創造したワッツ・タワーを想起させる が、なにかが根本的に違う。エディには、ああいう職人的技巧や神秘的ビジョンはなかった。ある種のフォーク・ アート? NYダウンタウン文化特有のジャンク・アートというのが的を得ているか…。エディは一昔はヴィレッジに こういう輩がうようよいたのだが一かなりの癖者で、上半身裸で真珠のネックレスをまとい、裸足で歩き廻り。タ ワーは倒壊する危険性があると、取り壊しを巡ってメンバー間の論争が絶えなかった。本人も物議を醸すことが多 かった。やたら反骨精神が強く、怒りっぽい気性ゆえ、名物男として親しまれながらも、一部からは敬遠されてい た。2007年に74歳で亡くなり、その一年後、老朽化にともないNYC公園レクリエーション局が取り壊しを決定。 クレーンが唸りをあげ、解体された廃材が次々と道端のダンプスター(巨大なゴミ溜)に投げ込まれ、オブジェなどの 一部は有志が持ち帰った。跡形もなく消え去り、ヴィレッジの伝説と化した。

17. 6BC・ボタニカルガーデン

630 East 6th Street

イーストヴィレッジで最も見目麗しいガーデンではなかろうか。 ボタニカルガーデン(植物園)というだけあって、季 節ごとに咲き誇る花、常緑樹や紅葉樹の低木・・・、多種多様な植物が眼を楽しませてくれる。 8月に入り、ロックダ ウンが段階的に解除され、再開に向け、メンバーがしばらく放置されていたガーデンを清掃している。竹箒で落ち 葉をかき集め、ガサゴソと。「馬の鈴草」という蔓草におおわれたミニ・サイズの東屋に潜り込む。コオロギが何 匹か金切声で高周波を発する。曇り空の下、霧雨がふわりとホワイト・ノイズのように空気を湿らせる――。 1981 年、このガーデンがオープンした当時のヴィレッジはまるで違っていた。当時の財政危機の影響で「反投資」と呼 ばれる放置政策がアルファベットシティを荒廃の極みに追いやった。多くの家主が保険金目当てに誰かを雇って 放火させたため、焼け落ちたビルや、瓦礫だらけの空き地がいたるところにあった。当時の写真を見ると、空襲 の爆撃を受けたかのようだ。見捨てられたビルは、ドラッグの取り引き、売春の牙城、違法のゴミ捨て場に使われ た。このガーデンも例外ではなく、運営に関わっていたレニー・リビリッジいわく、「グラフィティの描かれた壁に 沿ってフェンスがあり、その間の路地はヘロインの売買に使われていた。 夕方5時くらい、まずジャンキーたちが 現れる。で、その後はディーラーだ。ジャンキーたちは並んでブツを手に入れ、5丁目か6丁目に逃れた。あっとい う間、ほんの2、3分だった。誰にも気づかれずに消え去った」。当時はずらりと並んだ園芸用の花壇があり、メン

バーは野菜を栽培していた。にもかかわらず、「多くのメンバーが野菜を育てるのを止めてしまった。手塩に掛け て育てても、結局は盗まれてしまうから。で、植物園というアイディアが生まれてきた。それに、ニューヨークの他 の四つの区(ブルックリン、クイーンズ、ブロンクス、スタテンアイランド)には植物園があるのに、マンハッタンにはなかっ た。だから、このガーデンは非公式の『住人による住民のための植物園』なんだ」。思いもよらぬ経緯をへて、現 在の形態にたどり着いたようだ。だが、たった今、わたしの眼の前にある端正な景色はそんなことを微塵も感じさ せない。 時代が変わったということなのか? それとも…?

18. エル・ジョーダン・デル・パライソ

4~5丁目にかけて広がる「パラダイスの庭」は、イーストヴィレッジで最も大きなガーデン。 昔は10軒ものテナメ ントがこの敷地に建っていたという。プエルトリカン達がたむろするコテージではラテン系の音楽が大きなスピー カーから絶えず流れ、ガーデナー達が 園芸用の花壇の並びで仕事に励み、だだっ広い芝生の公園では鳥達の さえずり、巨大なしだれ柳の根元に作られた木製のプラットフォームの上では誰かがギターを練習している。それ らのエリアは、回遊できるように小径でつながれている。作り込まれていない野放図な魅力がある。ロックダウン 中でもビジターを迎え入れていた唯一のガーデンか。それゆえ、頻繁に訪ねた。アナーキックな気風が――かつ てのヴィレッジがそうだったように――色濃く残る。このガーデンが始まった頃からメンバーの写真家のデイヴィッ ト・シュミドラップは、「1981年、週末にロイサイダを訪れ、入植者のプログラムに関わっていたガールフレンドを ヘルプし始めた。マンハッタンの貧困に喘ぐ人達の多い地域で市が運営していたんだ。低所得者が集まって、1ド ル払えば、ビルを7年以内に(市や州の)建築基準法に適合するように改築して、そこに住むことが許された。僕ら のビルは天井も床もなくて骨組みがかろうじてあるだけ。要は、僕らが住むことによって、泥棒から守ることにな るわけ。ビルを立て直すのは、10年以上の血と汗と涙の結晶だった。そのビルの外には、市が僕らのよりもっと 酷い状態のビルをブルドーザーで壊した巨大な跡地が広がっていた。それが、エル・ジョーダン・デル・パライソに なった。ドラッグのやり過ぎでぶっ倒れている人も、ビルの地下で死体を見つけたことも…。でも、憶えておくべ きことは、コミュニティーの絆の深さがあったことだ。プエルトリカンや、その他の労働者や、アーティスト連中や、 皆が廃墟と化した街で新たなコミュニティーを夢み育んでいこうとしていた」。

19. ジェネレーション X・カルチャル・ガーデン

270 East 4th Street

ガーデンの周りを取り囲むフェンス沿いに掲げられた万国旗がバタバタと風にはためく。ゲートの前にいた男に 声を掛けると、何十年にも渡りこのガーデンを管理してきたエドウィン・アルバート・サンタナだった。いきなり鍵を くれ、「いつ来てもいいよ」、と。1971年に始まった時は、「Tu Pueblo Batey(チュ・プェブロ・バタイ)」という名前だっ たが、若い世代の関わりを重視して、ジェネレージョンXに変えたという。90年代半ばに撮られたイーストヴィレッ ジのコミュニティーガーデンについてのドキュメンタリー映画『DIRT』にアルバートと他のメンバー達が登場し、荒 れ地に園芸用の花壇を自分達でこしらえている(今は、リンゴ、梨などの果樹園とステージもある多目的スペースが…)。最 も年長のメンバーで始めた当時22歳だったというから、実に若々しかった(今や、彼らも40~50代か…)。 若者達への 啓蒙として、イーストヴィレッジを構成する多種多様な人種と文化の違いをグローバルな視野で理解し体得するの が、活動の主眼だと。それゆえの万国旗なのだろう。

20. ケンケレバ・ハウス・ガーデン

212 East 3rd Street

3丁目から鉄の柵越しに見える草地に20かそこらの彫刻が立ち並ぶ。まず目を引くのが『Bobo, The Flying Man(ボボ、空を飛ぶ男)』と題されたワシントン在住の彫刻家、ウジキー・ネルソンのアフリカ的な美学を彷彿させる 青いステンドグラスが埋め込まれた鉄の彫刻か。他の作品も含め、アフリカン・アメリカン・アートの伝統がうかが える。このガーデンはコリーン・ジェニングスによって運営され、彼女が夫のジョー・オバーストリート(2019年に亡く なったアフリカ系アメリカ人アーティスト)らと始めた2丁目にあるギャラリー、ケンケレバ・ハウスに属している。アフリ カ系アメリカ人やメインストリームから外れたアーティストを紹介してきたので、それゆえか…。加えて、ふたりは 長年に渡ってヴィレッジのアートシーンを牽引し、ローカルなアーティストとのつながりが強い。『Wave』という 葛飾北斎の波の版画にインスピレーションを得た青い鉄のパイプの彫刻を数年前に設置したキャシー・クロイズ バーグは、「この作品はガバナーズアイランドでの展覧会のために作った。その後、どこに保管するか選択肢が なくて困っていたところ、コリーンが救いの手を差し伸べてくれた」。彫刻群は、常設も、一時的なものもあるが、 1980年にオープンしてから現在にいたるまでの活動の積み重ねは、眼の前に視覚的なレイヤーとなって顕在化 している。しばらく「彫刻の庭園」でたたずんでいて、ふと思った。それらの記憶のレイヤーを聴き取ることも可能

21. アルバートの庭

2丁目にひっそりとたたずむ「アルバートの庭」は、大都市の「隠れ家」 …。 訪れると、マスクをした若い女性が数 時間ベンチに腰掛けて読書、もう一人の車椅子の老女は微動だにせず黙想に耽る。ビジターを瞑想に誘い込む サイレンスが、思い出したように飛来する野鳥が小さなプールでパシャパシャと水浴びする音で遮られる――。 1971~72年辺りに始まったというから、この界隈で最も古いガーデンだ。同じ通りに住んでいた創始者のア ルバート・エイゼンローが一彼は、リズ・クリスティー・ガーデンにも関わっていた一初期のメンバーであるベン・ ウォールバーグやルイーズ・クルーガーと一緒に使われなくなったバスケットボール・コートのアスファルトを掘り 返し、整備し始めた。ガーデンの小径は舗装されていなくて土のままだったが、ルイーズは彫刻家だったので、木 彫の際にでるおがくずで覆うようになった。 小さな池は1980年頃にしつらえたそうだ。 半世紀の歴史をひも解く と、何度も市にオークションにかけられそうになり、その度になんとか切り抜けて来た。1998年、ジュリアーニ が多くのガーデンを競売に掛けようとした際、自然保護団体のトラスト・フォー・パブリック・ランドがガーデンを 救うために購入した61ヶ所の土地に含められ、ようやく恒久的に存続する権利を得た。この安堵感はそれゆえ - か――。ガーデンの奥の方から虫の音がする。近づいて探そうとするのだが、何処からか見当がつかない。近 にいた古参のメンバーのイージェイが、実はガーデンの裏にあるビルに備え付けられた空調の音であることを教 えてくれる。これは「都会の自然」であって、実際の自然とは似て非なることに気づかされる。

22. レ・プティ・ベルサイユ

247 East 2nd Street

日没後、「小さなベルサイユ |を訪れると、このガーデンを運営するふたり組の片割れピーター・クレイマーのイン スタレーション『In The Realm of Anansi From Assisi(アッシジのアナンシの領域で)』が展示されている。2020年 の春、ダウンタウンの劇場ラ・ママで彼のパートナーのジャック・ウォーターズによって監督された舞台作品の美術 の部分をガーデン向けにアレンジしたもので、ゲートを入ると、ケバケバしくバーレスク風のオブジェの数々、ビル の谷間に張り巡らされたクモの巣のようなオレンジ色のロープ、「THE VIRUS IS US MASK UP! (我々がウイル スだ、マスクをしろ!)」と記された貼り紙などが樹木や植物に絡みつくように…。彼らが友人達と演奏した不気味か つ瞑想的な音楽がスピーカーから流れ、観客が小径を歩くと生い茂った木の枝に擦れる音がささやきのように、 ハウストン通りの車通りが寄せては返す波の音のように聴こえる――。 ピーターとジャックは80年代初頭からダウ ンタウンで活動を続け、ローワーイーストサイドのオルターナティブ・スペースABC No Rioを運営していた。イー ストヴィレッジの伝説的なピラミッド・クラブともつながり、この都市のクイア・コミュニティーを牽引してきた。「アー トは社会的なツールであり商品ではない」というアクティビズムが活動の根底にある。ピーターいわく、「ガーデ ンの横にあるアパートに85年から住み始め、90年代の半ば、ジュリアーニが市長だった時、この場所にあった違 法な「チョップ・ショップ(盗んだ車を解体して部品を売る店)」が立ち退きになりフェンスで囲われた。NYC住宅保全開 発局は何のプランもなく、地域のコミュニティーの委員会やグリーンサムの助けを得て整備をし始めた。その後、 少しずつアートスペースとしての体裁を整え、2000年以降は定期的にイベントをプログラムしている。普段は他の アーティストを紹介するだけで自分達の作品は見せない。でも、コロナ禍でそれも難しく、しかも『アッシジのアナ ンシの領域で』はウイルスを扱った作品だったから面白いと思った」。会場の外の歩道には、近所に住む彼らの友 人のアーティスト達が集まって、皆の声がガヤガヤと通りに響いている。アートスペースやナイトクラブのように機 能するガーデンがあってもいい。

23. リズ・クリスティー・コミュニティーガーデン

East Houston Street between Second Avenue and Bowery

いわずとしれたこのガーデンは、1973年、リズ・クリスティーと志しを同じくするグリーン・ゲリラのメンバーが始 めた。コミュニティーガーデン運動の黎明期。それゆえ、この場所は神聖なオーラを放つ。だが、となりの敷地の 巨大なコンドミニアムとハウストン通りの向いのホールフーズ・マーケットに挟まれ、半世紀後、資本主義の荒波 に飲み込まれたかのようで、なにかしらシンボリックにすら思える。ガーデンの創設当時から運営に関わってきた ドナルド・ロギンズが迎え入れてくれ、しばらくガーデンの中を散策する。何百種類もの様々な植物、石畳や砂利 におおわれた小径、二つの小さな池などが精緻なタペストリーように編み込まれ、完璧な美を具現化している。ア ンダーグラウンドなアクティビズムから始まった場所からすると、ある種の隔たりが興味深い。交通量の多い大通 りに三方を囲まれ、さぞかし車の騒音がうるさいと思うが、初夏で樹木が生い茂り、それらがフィルターとなりプロ テストされている。不思議なくらい静か…。ドナルドが面白いことをいう。「このガーデンが立ち退きにならなかっ た理由のひとつは真下に地下鉄の駅があるからなんだ。ビルを建てたくても無理」。守護されてきた場所なのか?

24. チルドレンズ・マジカル・ガーデン

ローワーイーストサイドのスタントン通りとノーフォーク通りの角にあるこのガーデンもロックダウン以降、ずっと足 踏み状態。夏の終わり、メンバーのジョージ・ヒロセがゲートを開けてくれる。ビニールシートの上に描かれたカラ フルでユートピアンな壁画、子供向けの遊具、宇宙船のような楕円形の小屋…。 三つの学校に囲まれている土地 柄か、「子供向け」ということが重要視されてきた。だが、コロナ禍で学校も閉鎖、子供達の歓声は当分聴こえな い。フェンスがふたつの通りに面しているので、通行人の話し声、カーステレオから響く低音のビート、近くの大通 りの車通り……、色とりどりの街のアンビエンスが流れ込んでくる——。ガーデンの敷地が別のフェンスでふたつ に分断されていることに気づく。ジョージは、「こちら側はグリーンサムを通じてチルドレンズ・マジカル・ガーデン によって管理されている。でも、向こう側は不動産開発業者が不当な権利を要求し、いまだに法廷で争われてい るんだ」。土地に眼をつけた開発業者たちが、何十年に渡ってチルドレンズ・マジカルが管理しつづけてきた土地 にコンドミニアムを建てようとしているのだ。そもそも、1982年、麻薬の取引に使われ、ゴミだらけで10年以上も 見捨てられていた土地をガーデンの創始者たちが付近の住民と一緒に片付け始めた。それを考えると、酷い話で ある。2014年、ガーデン側は裁判に持ち込み、地域住民、近隣の学校、他のガーデンのサポートを得て、反対運 動を繰り広げた。4年後に州の最高裁判所で訴えが認められるが、いまだ解決したわけではない。「見捨てられ 誰も見向きもしなかった場所だった。当時は犯罪のはびこり、子供たちが遊ぶ場所すらなかった。コミュニティー に根差したアクティビズムが根本にあった。で、何十年もたって、不動産業者が『お前たちはここを使っていたが、 我々が必要になったから返してもらう』、と。当然、僕らは『No』という!」

Aki Onda Silence Prevails: East Village Community Gardens During the Pandemic 2020

Is it possible to hear the sounds of the past? By firing up the imagination, by tapping into an intricate network of knowledge, by experiencing things first-hand and putting one's sixth sense to work? This question may be an unexpected one, but I decided to try just that, by standing in the community gardens of the East Village and listening closely.

Strolling through the East Village neighborhood of Manhattan, you will find oases of greenery all over the place. These are known as "community gardens," and they are used for diverse purposes: as places for neighbors to rest and relax; for children to play; for gardeners to cultivate vegetables, herbs, and flowers; for works of art to be exhibited and performances staged. Some gardens were created with materials scraped together by neighborhood residents and have a very DIY feel, while others are elegant and impeccably designed. Some are run democratically by dozens of members who hold meetings and make joint decisions, while others have a single organizer giving shape to his or her own vision. No two are alike, and each has its own unique charm. However, while their goals may vary, they are all managed independently, by and for the neighborhood.

I began traveling to New York City frequently in the mid-1990s. Before gentrification drove rents skyward and artists moved to other boroughs in search of more affordable housing, this area was home to many creative people, and it was here that I always stayed. Unlike today, Alphabet City (the part of the East Village where the avenues are lettered rather than numbered) was known as a dangerous part of town. Walking around, you had to stay alert to stay safe. At the same time, the freewheeling feeling of a genuine bohemian community was in the air. It was in this period that I became aware of the community gardens, and I was especially fond of La Plaza Cultural on the corner of East 9th Street and Avenue C. In the 1970s, Buckminster Fuller worked with local organizers to build his signature geodesic domes to meet the needs of poor communities and explore alternative methods of housing. One such dome was erected in La Plaza. In 1977 Gordon Matta-Clark and others erected a hemispherical amphitheater-style event space here. Yet despite these notable episodes from the past, the garden itself was rough around the edges and unpretentious. Nonetheless, I found it a cheerful and festive space. It was not until much later that I learned that those experiments had been organized by CHARAS, an organization supporting local Latino and Latina residents and founded by local activist Carlos "Chino" Garcia and associates. The movement was rooted in activism, in the promotion of educational activities for local people involving architecture and art. Incidentally, Garcia and the poet Bimbo Rivas named the area "Loisaida," a Spanglish pronunciation of Lower East Side. As the name came from actually spoken language, it caught on quickly with the neighborhood and is still used today.

The terminology is confusing here, and I would like to explain this perplexity. The East Village was known as the Lower East Side until the 1960s, when the artists getting priced out of Greenwich Village moved into the area, which had been populated mostly by working class immigrants. The East Village, as a term, came about through the real estate market in an effort to shake perceptions of the area as gritty and crime-filled. Because of this, many of the residents of Alphabet City / Loisiada / East Village referred—and continue to refer—to their neighborhoods as the Lower East Side / Loisaida.

Jumping forward in time ... Over 15 years ago I heard a fascinating story from the experimental filmmaker Jonas Mekas at the Anthology Film Archive (AFA) on the corner of East 2nd Street and Second Avenue, where I was a frequent visitor. It was about his fellow experimental filmmaker Harry Smith, who was an expert on cultural anthropology and ethnomusicology and well versed in the occult, as well as deeply committed to the downtown scene. In the late 1980s, Smith stood on the streets of the Lower East Side and recorded urban soundscapes on cassette tapes. He carried out this project street by street, and numerous tapes are in storage at the AFA. Mekas knew that making field recordings on cassette was part of my artistic practice, and that I was interested in Smith's workthis is why the subject came up ... An idea occurred to me. Why not stand in community gardens and preserve the sounds I heard on tape? Could I then hear the echoes of the sites' past? Following Smith's methodology, would I, too, be able to pass through reality and access something universal, limitless on the other side?

As I investigated Smith's project, I came to understand a number of things (though many are still veiled in mystery ...) It was called "Materials for the Study of Religion and Culture in the Lower East Side or Movies for Blind People," and it was his last project before his death. Launched in New York, the project continued in Boulder, Colorado. The many and varied soundscapes include a Haitian open-air market, homeless people coughing and praying on the Bowery, poetry readings by Gregory Corso and Allen Ginsberg, ambient noise in Tompkins Square Park, and much more.

Considering Smith's project prompted more historical wondering. How did the East Village's community gardens, the setting for my own project, come to be? The area was historically a slum inhabited by a succession of poor immigrant communities, including Italians and Jews from Eastern Europe who began arriving in the 19th century, and Puerto Ricans after World War II. In the 1970s, New York City fell into a severe financial crisis and began slashing budgets for public services, including the police, sanitation, and fire departments. Areas with many low-income residents were the hardest hit, and many descended into ruin. Landlords began abandoning their own buildings and setting them on fire for the insurance money. The city seized the land due to landlords' tax delinquency but left vacant lots unattended and uncared for, resulting in rampant drug dealing, prostitution, and illegal garbage dumping. Streets became more dangerous, crime was commonplace, and the everyday reality residents faced was desolate. The homeless population kept rising, and streets were infested with huge numbers of rats. This was the environment in which most community gardens emerged. Living in a traumatized neighborhood, the first garden organizers were driven by necessity, by the need to improve their lives and find sources of

In 1973, a group of volunteers led by activist Liz Christy took control of a vacant lot along Houston Street and began creating a garden. Calling themselves the Green Guerrillas, they sought solidarity with other gardeners, distributed seeds and fertilizers, gave advice, and expanded the movement. What made Christy extraordinary was that she also advocated at the political level. In 1974 she approached the New York City Department of Housing Preservation and Development (HPD) and acquired rights to use the land for \$1 per month. The following year she launched the Open Space Greening Program as a part of the Council on the Environment of NYC (CENYC). As the movement gained momentum, the number of gardens grew. In 1978, HPD created the GreenThumb, the NYC Parks community gardening program, which rents land for \$1 a year to groups who manage gardens on city-owned, vacant lots. And that is not all: federal grants were secured to distribute soil, fertilizer, seeds, and gardening utensils and to start conducting gardening workshops. Today, many gardens are still licensed through GreenThumb.

However, in 1994 the newly elected Republican mayor, Rudy Giuliani, announced that he would auction off many community gardens to make up the city's budget deficit. While the land was owned by the city, it was residents who had volunteered to maintain and beautify the abandoned lots. To reclaim and redevelop the land as soon as land prices rose due to gentrification was a deceptive and underhanded tactic. Garden organizers united in protest, but many gardens were plowed under by bulldozers. Aghast at what was going on, the New York Restoration Project (NYRP), spearheaded by singer Bette Midler, and the environmental organization Trust for Public Land (TPL) made a deal with city administrators to purchase the land beneath 112 gardens. These gardens are now guaranteed permanent protection, but others to renew short-term license agreements, and their future remains uncertain and highly vulnerable to fluctuations in the real estate market.

Moving ahead to the present day, the COVID-19 crisis struck just as I was about to start this project. The pandemic swept the globe, and as of March 2020, New York was its epicenter and under full lockdown. GreenThumb made a decision to close the East Village's community gardens until further notice. Only members were allowed to enter, and my project ground to a halt. However, I began contacting individual gardens directly, thinking that documenting their state during this extraordinary time would add a new layer of significance. As the project got underway, these layers only continued to appear. After the death of George Floyd, protests by Black Lives Matter (commonly abbreviated as BLM, a movement to end violence against African Americans and systemic racism) spread nationwide, and streets were flooded with people in the East Village. Starting in July, individual gardens were permitted to decide whether to admit visitors, but many kept their gates closed. There was a growing number of homeless people on the streets, and although the lockdown was gradually eased, many stores went out of business, with the storefronts remaining shuttered amid a looming recession. The summer saw the COVID-19 crisis in New York alleviated somewhat, but public anxiety was only increasing due to political turmoil ahead of the presidential election in November. It has been a year of one shock after another. Under these circumstances, spending time in the gardens was truly comforting. Not only are they sparsely populated outdoor spaces where there is low risk of catching the virus, but they are also places of repose for the spirit, reflecting their origins as "green oases" that sprang up amid urban decay.

The following is a record of what I heard and saw (and possibly experienced with senses beyond the usual five) during my explorations of East Village community gardens between April and August 2020.

1. Relaxation Garden Corner of Avenue B & East 13th Street

I remember passing by this garden on the corner of East 13th Street and Avenue B more than ten years ago and seeing a large number of colorful mobiles and animal ornaments, which looked like the kind of thing kids would love, swaying in the breeze. It was a delightful garden, where neighborhood residents gathered . However, when I stop by again at the end of this summer, the scene I see cannot be more different. The garden was temporarily closed due to construction work on the building next door; it was overrun by rats. heaps of garbage were thrown in, and, although NYC Parks Department staff cleaned it up a few years ago, it's still in wretched shape. A group of Latino and Latina residents, who say they are former members, have gathered around something on the sidewalk outside the fence. Looking down, I see a dead rat with its head torn off. They tell me, "Every evening, a baby hawk that lives nearby in Tompkins Square Park flies in and hunts rats. We're really grateful for that." Like any garden, it can only survive with constant care from members. When that is gone, it goes back to being a wasteland before you know it.

2. El Sol Brillante

The spacious grounds of this garden are full of carefully tended plots. One of the members says that, due to the lockdown, "Many of our garden members have had more free time to fill with gardening and maintenance of the garden." Another member tells me: "Many hours of loving labor have been spent making it the oasis of serenity it is today." As I stroll around the garden, I feel it is pervaded by an atmosphere that soothes visitors. The name, El Sol Brillante (Spanish for "the brightly shining sun"), testifies to its cheering effect. As a community garden where the gardeners themselves, with the help of the Trust for Public Land (TPL), acquired the deed to the land, it is a rarity in New York. Perhaps having permanent rights to the land and not constantly fearing its loss contributes to the tranquil ambience ... On East 12th Street, outside the metal fences and gates with cutout letters and patterns designed by Julie Dermansky, every Saturday there is a moving sight: a food pantry run by a charity on East 11th Street provides canned goods, and a long line forms, stretching across Avenue B to East 12th Street. Garden members on the premises tell me they have never seen it so long. For some reason most of the people in line are of Chinese ethnicity. Their conversation reverberates in the garden, as does the rolling sound of the carts they are all pulling. Is this a soundscape unique to the time of the pandemic?

3. Campos Community Garden

Stepping into the garden I find rows of plots, thirty-one of them, extending into the depths of the fivethousand-square-foot site. Summer vegetables and herbs are flourishing and flowers are in full bloom. This garden gets a lot of sun and is well suited for growing things. The midsummer sun beats down, and I can hear the splashing sound of a hose, while the tinkle of wind chimes hanging from a tree makes it feel a little cooler ... Christopher Batenhorst, who serves as leader of this community garden, tells me: "In 2004

EAST VILLAGE **Tompkins Square Park** 6th Street and Avenue B

Beverly McClain, who lived in the neighborhood, passed this place every day when she was walking her daughter to school. It had once been a garden, but it had reverted to being just an overgrown vacant lot. Beverly decided to work with other members of the PTA and make it into a garden again." Since then the number of members has grown. People come from different backgrounds, and the garden has a strongly multi-cultural character. Also, unusual for a garden in the East Village, a high percentage of the plots are tended by families, partly because there are a lot of projects (affordable, low-income housing complexes) in the neighborhood. "Historically, the East Village had a lot of tenements [apartment buildings with multiple units on each floor, home to many immigrants and low-wage workers], and these buildings were full of families. But the Village is a different neighborhood today, and it's not an affordable one." There is an increasing number of condominiums and student dormitories, and the community's demographics and lifestyles have changed. When I ask about the impact of the coronavirus on the neighborhood, Batenhorst replies, "For the last several months people have been saying that COVID is killing New York, or New York is over. I think there may be a recession, but maybe that's a good thing for the city. The older people say the '70s were much more interesting. It may be a reset for a heavily corporate city ... I hope it is. I don't want to go back to the crime-infested Village, but I don't want to live in a Disneyland in a corporate sense." Whatever happens, it's clear that the pandemic is a major turning point, not only for the world at large, but also for this particular community.

4. East Side Outside Community Garden

The cheerful voices of teenagers playing basketball and the sound of the ball bouncing echo from the grounds of the East Side Community High School next door, Meanwhile, in the spacious garden, the sounds are of shears snipping as gardeners prune shrubs. The city is quiet under lockdown, but some activities are still going on here ... According to member Ryan Mendenhall, several groups share this garden. From 1992 to 2010, the garden and the adjacent playground were named Open Road Park (the greenhouse and shipping container used for storage seem to date from that time). In 2010, the original gardeners of Open Road Park abandoned the garden for reasons that are unclear. In 2015-16, the Reclaimed Organics composting group set up a base in what they thought was a vacant lot, but Bangladeshis from a neighboring mosque were already growing vegetables here (when I visit, the plants are hanging heavy with large squashes unique to South Asia). In 2016, the compost crew, in collaboration with neighborhood residents as well as students and staff of the high school, formally reentered the GreenThumb program under the name East Side Outside Community Garden, and today these various groups coexist like a patchwork quilt. In fact, there used to be a bus terminal and garage here (one of its cement partition walls still stands near the entrance). It is interesting to observe traces both obvious and subtle, scattered throughout the garden, of the complex story behind the site.

5. Toyota Children's Learning Garden

In the late 1990s, this garden site was purchased by the New York Restoration Project (NYRP), a non-profit organization dedicated to creating more green spaces in the city. The current garden was designed by architect Michael Van Valkenburgh in 2007 with support from Toyota. It is quite different from other gardens in the area, serving as a place for relaxation that has nothing to do with gardening. Its gates have stayed closed since the lockdown began, but Magari Regis, a member living in the building next door, lets me in. There are no sounds other than the rustling of bamboo in the wind and the drone of an airplane

passing overhead. Has time stopped? I learn that originally a Puerto Rican woman living in the building next door raised chickens and grew vegetables here. The only remnant of her efforts is a kiwi vine which had been growing up the side of a building (now moved, and supported by a stylish aluminum trellis). Evidently the woman was particularly proud of a magnificent rose bush that once grew near the entrance. She has passed away, but there is a leafy rose bush in the same spot, which Magari planted in her memory.

6. La Plaza Cultural de Armando Perez Community Garden

In May, during the lockdown, local artist Rolando Politi re-adorned the garden fence along Avenue C with a group of sculptures made from discarded materials. Entitled Winter Flowers, it consists of more than 200 bricolage works, produced by cutting up old aluminum cans and plastic containers and decorating them in vibrant colors, resembling flowers. Last year, the garden dismantled a rusty, sagging wire fence and installed a splendid new iron one in its place. The Winter Flowers had been there for approximately twenty years, and while they were removed during work on the fence, they are now back in place. Silence has fallen over the garden, but just outside the fence, colorful and joyful "flowers" bloom and soothe the troubled spirit (they're especially welcome amid the trauma of the pandemic). Rolando Politi's work can be seen in quite a few community gardens. He is an artist with strong ties to the history of

7. 9th Street Community Garden Park

This is one of the largest gardens in East Village. I take a walk around it early one morning. There are more than twenty plots for growing vegetables, herbs, and flowers; a goldfish pond; a large number of communal spaces; a barbecue area; beehives in one corner; and spaces for a variety of purposes, all organically arranged. Each time I pass through each area, different sounds enter my ears. But nearby on Avenue C roadwork is in progress, and drills pummeling asphalt make a racket that occasionally drowns everything out ... I first visited this garden more than twenty years ago, and its overall design and laidback atmosphere have not changed since then, except for one major difference; the giant weeping willow that was its crown jewel is now gone. The tree was planted in 1977 by two activists, Liz Christy and Chino Garcia, before the garden's establishment in 1979. It put down roots in the rubble-covered ground, grew along with the garden, and watched over all the changes taking place around it. Then in 2012, Hurricane Sandy pulled contaminated water from the East River and flooded the garden, eroding the tree's roots and causing it to wither, and a few years later it was cut down and its rotted trunk uprooted. When I visited the garden, however, I was amazed to see a little willow tree in its place. Upon asking a member about it, I was told that "the new one sprang up from the roots of the old one after it was chopped down." The great cycle of life; half a century from now, will a giant weeping willow stand here once more?

Late at night, after the noise of the city has subsided, I return to the garden and open my ears to its sounds again. I walk around, my path illuminated by lights from the surrounding buildings, with a chorus of countless crickets providing a soundtrack. Standing under the weeping willow, I hear the whisper of its drooping leaves

cleaned up a garbage-filled vacant lot. Today he is still managing the garden himself, with help from his friends. Inside the vividly colored gates along Avenue C, the sound of scissors clipping fruit that hangs from a grapevine trellis, the fluttering of white carrier pigeons in a giant birdcage, and the booming voice of Santos talking to visitors reverberate off the buildings on either side of the site. "The '70s and '80s were crazy around here, but if you are part of a family everybody knows everybody, and there was a strong sense of community. If you did something bad, everybody was watching you." Some gardens, such as La Plaza Cultural and 9th Street Community Garden Park just a stone's throw away, are democratically organized by large groups of members. This garden appears to revolve around one man, Santos—his own miniature cosmos. A garden is a garden, but no two are alike.

This garden's story begins in the '70s when Santos Matos, a Puerto Rican man living in the neighborhood

9. De Colores Community Yard & Cultural Center

In the 1990s, one could hear the roar of bulldozers relentlessly crushing the plots in community gardens. Under the Giuliani Administration, many gardens were seen as "interim sites," space savers for future development, and were served with eviction notices ... Elizabeth Ruf Maldonado tells me, "I was a member of ABC Garden on East 8th Street. One morning in January 1996, I could feel the rumble of the bulldozers destroying ABC as I showered in my apartment. I dressed and went outside, and the plots of the fifty nouseholds of ABC Garden, including fruit trees, had been completely leveled. The City told gardeners the site would be used for senior housing, but there were many truly vacant lots in our area. Giuliani wanted to divide gardeners and confuse the community with the false 'housing or gardens' dichotomy. The gardeners knew the truth, and Giuliani wanted us out. By spring, several of us who were displaced from ABC started to help beautify a site across 8th Street alongside the current gardeners of that space: Carol, with her white rose bush, Cuba, who grew vegetables, and Ralph, who stored a big orange boat there painted with barracuda-like teeth on the prow. Strawberry bushes grew in the underbrush. I was pregnant with my daughter, but I helped move heavy rubble into dumpsters. It was nerve-wracking because there were a lot of syringes strewn about. We covered our central area with soil shoveled out of a trench Con Ed had dug to do work under the street. There we planted a big plot of grass that took root by May, and that's how we became a community yard. De Colores is named after a popular Spanish-language song that celebrates nature, togetherness, and diversity." The legal status of the garden was vulnerable since the city planned to put the plot up for auction. Gardeners organized, won the support of the local community board, and testified at the Department of City Planning (DCP), which finally decided to recommend the garden for a GreenThumb lease. All kinds of community events have been held here, including concerts, performances, political gatherings, weddings, birthday parties, memorials, and yoga classes. Events are not always planned—sometimes they just happen. "Our apartment is very small and crowded, so the garden has been an extension of our family's living room for my daughter and our friends and pets. Even in winter, we come here a lot to make snow creatures and hot cider, or even to read and play music on sunny days." Considering the housing situation in the tenement buildings of Loisaida, this makes a lot of sense. A garden is a space that helps meet people's everyday needs.

10. La Casita Garden

To counteract the spread of the coronavirus, most Fast Village community gardens remain closed to the general public by order of GreenThumb at this time. Only members are allowed entry so they can tend to plants and clean up. However, at La Casita on East 8th Street, the gates stand open. Two middle-aged Puerto Rican guys in masks converse in Spanish. In rows of wood-bordered rectangular plots, freshly planted seedlings are beginning to sprout. There is a shed for gardening equipment, painted dark green, with two large frames on its walls containing disorderly collages of photographs of Puerto Rican neighborhood residents. The photos show people socializing with family and friends at restaurants, at home, in parks, and on the beach. They are probably garden members. The pictures are so sun-bleached they must have been hanging here for at least twenty or thirty years. The garden faces onto a part of East 8th Street away from the major avenues, so it has always been tranquil. Under lockdown, the quietness and stillness

11. Fireman's Memorial Garden

E 14th St

In mid-May, spring has finally sprung, and the well-tended vegetation here is already lush. There is a lawn encircled by a flowerbed and a walkway. It's said to be inspired by Adam Purple's Garden of Eden on Eldridge Street that was demolished in 1986. A graying, middle-aged man and a young woman in charge of garden management are planting seedlings and cutting grass. I ask if I can come in, and I'm told to go right ahead. Birds sing, puppies frolic, the sound of shoveling soil reverberates off the walls of surrounding buildings. The numbers of people testing positive for and dying from COVID-19 are on the rise, yet despite the extreme tensions gripping the outside world, a peaceful visual and aural landscape spreads out before me ... There is a large wooden sign with words carved on it: "Firefighter Marty Celic Memorial Park." The garden is dedicated to firefighters who died in the line of duty and is named for a young firefighter, Martin R. Celic, who was stationed at a fire department on the Lower East Side. In 1977, an arsonist set fire to an apartment building on this site. The building was engulfed in flames, and the firefighters working to extinguish the blaze were trapped on the fifth floor and fled to the fire escape, where they were rescued by cherry-picker. Celic, however, lost his footing and fell the ground, dying at the hospital eight days later. The building burned to the ground, and residents who had been tending gardens on adjacent lots expanded them to occupy this site. The middle-aged man told me, "There's no end of bricks from that collapsed building under the ground. If you dig down you hit brick after brick, so we use them to make borders for flowerbeds." In this way, this garden and many others like it are truly hanging gardens, suspended above the scorched rubble of the past

12. Green Oasis Garden

The sky seems to be weeping rain, and the sound reverberates as I walk over wet fallen leaves around "Gilbert's Sculpture Garden," a part of this larger community garden. Carved wood and stone sculptures by Gilbert Ingram, who lived in the next building next door, are strewn around as if forgotten. At a red-painted hexagonal gazebo, the symbolic face of the garden, organic vegetables are distributed by CSA (community supported agriculture) farms and LUNGS (Loisaida United Neighborhood Gardens, an organization that supports community gardens in the area), and neighborhood residents appear one after another. After chatting for a while they depart with bags stuffed with vegetables, at a cost of ten dollars ... In 1981, founder Normand Valle and his partner, Reynaldo Arenas, began clearing up a vacant lot buried in rubble, creating a place for children in the neighborhood to play safely and for artists, poets, and performers to present their works. Reynaldo would sometimes put on plays for children (There is a stage even now). There were events for neighborhood residents ranging from wedding ceremonies to the Puerto Rican religious holiday Fiestas de Cruz (Festival of the Holy Cross). Normand and Reynaldo have both passed away from AIDS, their ashes scattered on the grounds of the garden, but their shared spirit lives on.

13. Carmen Pabón del Amanecer Garden

A 'Green-Up Day' is underway, coordinated by the Museum of Reclaimed Urban Space (MoRUS) and Time's Up!, organizations that promote urban activism, including the community garden movement. Volun teers have gathered to take care of the garden. Under the direction of Bill DiPaola, one of the founders of MoRUS, about ten young students replace soil in flowerbeds, prune overgrown flowers and trees, and spray water with hoses ... The garden has been closed during lockdown, but now that people have finally returned, the soundscape is a lively one. Bill says, "It'll be good if a few of these people stay interested in what we do." The organizers at the core of the garden movement are aging, and opportunities to reach out to young people and build bridges to the next generation of participants are needed ... Just to the left of the gate is a carved and painted relief mural made in 1984, the year the garden opened, with the inscription "One Generation to Another La Lucha Continua" (the last part meaning "the struggle continues" in Spanish). It depicts two children, appearing to be African American or Puerto Rican, walking hand in hand with a map of Loisaida in the background. This garden was established by Carmen Pabón, who immigrated from Puerto Rico and was a foundational presence in the garden movement in the 1970s. In the late 1990s under the Giuliani administration, however, two-thirds of the site was sold to a real estate developer and the remainder was closed for seventeen years while a building was under construction. (It was more than a bit ironic that the garden was reopened by Donald Capoccia, the controversial developer who bulldozed several gardens in the neighborhood and demolished the other part of Carmen Pabón Garden ... At the reopening ceremony, Capoccia said he's now an "embracer of community gardens" and that "it's really the beginning of Ihisl rehabilitation." Perhaps he's a true convert, but the fact that these particular gardens now align with his financial interests seems hard to ignore). After years of struggle, the garden nevertheless survives, and while Carmen passed away in 2016 at the age of 94, the mural is a memorial to the beloved community activist nicknamed "the mother of Loisaida."

14. Lower East Side Ecology Center Community Garden

On East 7th Street, in front of the garden, is a recycling drop-off site where people bring kitchen scraps for composting. The program's founder, Christine Datz-Romero, and the rest of the staff are on duty, and every five minutes or so a neighbor stops by with a plastic bag of food scraps and heaves them into the large gray container. Many people know each other, and some stop to talk with Christine for long periods of time, the buzz of their conversation melting harmoniously into the Sunday morning ambience ... Christine, who moved from Germany to New York in 1980, saw the potential of recycling early on and started renting this lot from the City in 1990 for \$150 a month. Initially all composting was carried out here and kitchen scraps were converted into fertilizer on site. Over time the number of drop-off sites increased and, according to one interview, "the Lower East Side Ecology Center (LESEC) [created] soil amendment out of waste that transformed a rubble field into a green oasis, creating tangible impacts that neighbors could really connect to and appreciate." However, as the Center's activities expanded, the garden space was no longer sufficient. In 1998 LESEC relocated to the spacious grounds of East River Park. Since then, the garden has not been used for its original purpose, but Christine tells me "it remains a vibrant symbol for community-based composting and creating a closed loop system in an urban setting—taking a 'waste' product and turning it into asset for the community ..."

I enter the garden, open my ears, and hear stillness befitting a symbol. In the back of the garden, there is a shed, painted black, and hung on its walls are several flyers of jazz concerts and neighborhood gatherings held here in years gone by. Gazing into the past, I seem to hear the echoes of music that once

15. Sam and Sadie Koenig Garden

Early on a drizzling morning, veteran member Cathy Kord opens the gates for me. Pebbles crunch underfoot as we step onto a white gravel path laid over the brown soil. The first thing that catches my eye is a bronze-toned statue of a standing girl by artist Kiki Smith, who used to live on the same block (she lives in the Catskills now). Titled The Garden, it was donated by the artist in 2007. The girl's feet are buried in the ground up to the ankles, as if she sprouted out of the earth. Some kind of frozen presence or wordless silence prevails in the garden space. It is like an outdoor art gallery, with many works by other garden members installed on the ground and mounted on walls. After attuning my ears to the quiet for a while, I notice that there is another lot in back of this one. On entering it I find a tiny space-about the size of a cat's forehead, to paraphrase the Japanese expression-surrounded by bare fences, overgrown with weeds, with a ragged and run-down look in contrast to the beautifully maintained site facing onto the street. There are many works of art here as well ... This block, East 7th Street between Avenues C and D, was once nicknamed "Political Row" and was home to many politicians (unusual for the East Village, there are a large number of grand, ornate old buildings). The garden is named for Sam Koenig (A politician in the first half of the 20th century. It's said he once served as Secretary of State of New York) and his wife Sadie, who lived in the building next door, but it is shrouded in mystery and it is not clear just when it first opened. The garden was abandoned for some time, but Kathy and other members revived it in 1984, and while it seems it has been through various ups and downs since then, one thing is clear: friends and neighbors living nearby have been helping one another care for it lovingly over the years.

16. 6th Street and Avenue B Community Garden

On a swelteringly hot midsummer day, I walk in through the garden gate and find several members tending to plants on their plots. The garden faces onto Avenue B, a major street now nearly deserted due to the pandemic lockdown. Less ambient urban noise drifts in than usual, making tiny sounds in the garden that much easier to hear ... This garden was once home to a colossal hand-built tower. In 1985 house painter Eddie Boros, who lived around the corner on East 5th Street, used his garden plot as the base for a tower constructed from scavenged, discarded materials—an impromptu structure like a wrecked ship washed ashore. As the years went by it grew larger and larger, eventually stretching into neighboring plots and reaching twenty meters high, level with the surrounding buildings. All over the tower he hung stuffed animals, mannequins, papier-mâché horses, and all manner of found objects. I began visiting New York often in the late 1990s and always sublet an apartment in the East Village. The "Tower of Toys" was impossible to miss, and when walking by I would stop and gaze up at it—weather-beaten, grimy, emitting the unmistakable aura of outsider art. I was reminded of the Watts Towers, created by Simon Rodia in Los Angeles over the course of thirty-three years, but something was fundamentally different. Eddie did not have that level of consummate craftsmanship or mystical vision. Would it be more accurate to call his tower folk art? Or junk art, a genre peculiarly prevalent in the New York downtown scene? Eddie was quite the eccentric—there used to be no shortage of them in the East Village—walking around shirtless and shoeless, sporting a pearl necklace. There were ceaseless debates among garden members over the risk of the tower falling and whether it ought to be dismantled, and its creator was not one to shy away from a confrontation. A natural-born rebel with a short fuse, he was a local legend, but some neighbors prudently kept their distance. Eddie died in 2007 at the age of seventy-four, and a year later the NYC Parks Department decided to remove the aging tower due to the danger of collapse. A crane roared to life, and pieces of the demolished structure were heaved one by one into a dumpster out on the avenue. People laid claim to some of the found objects and carried them off to new homes. Not a trace remains, and the "Tower

17. 6BC Botanical Garden

of Toys" has passed into the realm of neighborhood lore.

This has got to be the most gorgeous garden in the East Village. Being a botanical garden, there are flowers blooming in every season, evergreen and broadleaf shrubs, and a wide variety of other plants to delight the eyes. When I visit in August, the lockdown is finally being gradually lifted and members are cleaning the garden, which has been left unattended for a while, in preparation for its reopening. There is a rustling sound of bamboo brooms raking up fallen leaves. I slip inside a mini-gazebo overgrown with a vine known as Dutchman's Pipe. A few crickets fill the air with continuous, high-pitched chirping. The sky is overcast and drizzle softly pervades the air like white noise ... When the garden first opened in 1981, the East Village was a different world. The city had been in a financial crisis, and a policy of "disinvestment," or deliberate neglect, had pushed Alphabet City into the depths of decay. Many landlords hired people to set fire to their buildings for the insurance money, and burned-out buildings and rubble-strewn vacant lots were everywhere. In photographs from the time, it looks like the aftermath of an air raid. Drugs were sold in abandoned buildings known as "shooting galleries" (as in shooting up, or injecting drugs). Some places were dens of prostitution; others became illegal dumping grounds. This garden was no exception. Lenny Librizzi, who was involved in its administration, says that, "for a time in the mid-to-late 1980s," one of its fences abutted an alley that was "used as a place to sell and buy heroin. Around 5 PM the buyers would start to arrive, then the dealer. The buyers would line up and could either go to 5th or 6th Street after

they bought the heroin. It all took about two or three minutes. Everyone would disperse and you would never know anything happened." At the time the garden was full of members' plots, where they raised vegetables. However, Lenny says, "most people moved away from growing vegetables as many of the vegetables would get stolen after all of the gardeners' hard work. Hence the botanical garden idea. Also, the other four boroughs of NYC have botanical gardens. Manhattan does not, so this became the unofficial People's Botanical Garden." It seems that unexpected twists and turns led to the garden's current form. Today, though, I see not a speck of that history as I gaze at the beautiful view. Does this mean that the times have truly changed? Or does it mean something else ...?

18. El Jardin del Paraiso

El Jardin del Paraiso ("Garden of Paradise"), which sprawls between East 4th and East 5th Streets, is the largest garden in the East Village. Apparently the site was once home to ten tenements. There is a casita (cottage) where Puerto Ricans gather and play Latin music constantly from loud speakers (younger ones play hip-hop at times ...), rows of plots with gardeners at work, a park area with a large lawn and birds singing, and a gigantic weeping willow with a wooden platform under it. Someone is sitting there and practicing the guitar ... Paths connect these areas so people can get around, and the garden has a rustic and not overly fussy charm. It was probably the only garden that remained open to visitors all through the lockdown, so I have visited often. There is still a strongly anarchic atmosphere, a sense of how things used to be in the East Village—something wild about the place. Photographer David Schmidlapp, who has been a member since the beginning, tells me, "In 1981, I started coming to Loisaida on the weekends to aid a girlfriend who was a homesteader. Homesteading was a city program to stabilize and repopulate destitute areas of Manhattan. A group of low-income people could buy one of these buildings for one dollar under an agreement that they would bring the building up to building code in seven years and live there. Our building had no roof and no floors; it was only a shell. Basically, we had to squat this building as we rehabbed it in order to protect it from thieves. It was a lot of blood, sweat, and tears and over a decade to bring the building into code. Outside our building was a large vacant lot where the city had bulldozed even worse buildings than ours. This soon became the community garden, El Jardin del Paraiso.

It wasn't uncommon to find people overdosed on drugs in our park. Once we even found a dead body in

our basement. The important thing to remember was there was always a sense of a community. Puerto

Ricans along with other working people and fellow artists were living and dreaming of a new community

19. Generation X Cultural Garden

in the midst of a ruin."

Flags of many nations hang along the encircling fence, fluttering in the wind. I speak to the man in front of the gate and learn that he is Edwin Albert Santana, the man who has been managing this garden for decades. Suddenly, he hands me a key and tells me I can come by anytime ... When it was first launched in 1971, the garden was called Tu Pueblo Batey, but it was changed to Generation X Cultural Garden so as to emphasize the involvement of younger generations. Albert makes an appearance in DIRT, a 16 mm documentary film shot in the mid-'90s about East Village community gardens by David Evans, Maria Liedholm Holter, and Catherine Williamson Duncumb, Albert and other members are captured cultivating their own plots for gardening in what had once been a barren, vacant lot. Today, however, there are no more plots, instead there is a multipurpose space with a stage and an orchard containing fruit trees such as apples and pears ... At the time the oldest member was twenty-two years old, so they were truly a youthful bunch (they now appear to be in their forties and fifties ...) He tells me that the focus of their activities is to introduce the youth of the neighborhood to different cultures, as it is important not to lose the history of the neighborhood and its diversity, and to expand this cultural understanding and experience to the entire world. No doubt this is the inspiration for the flags of many nations.

20. Kenkeleba House Garden

Approximately twenty sculptures stand on the spacious lawn, which I can see through the steel fence from East 3rd Street. The first one that catches my eye is Washington, D.C. sculptor Uzikee Nelson's Bobo, The Flying Man, an iron sculpture with embedded blue stained glass that conveys an African aesthetic, African American art traditions can be seen in other works as well. Evidently this is because the garden belongs to Kenkeleba House, a gallery on East 2nd Street run by Corrine Jennings, who founded it with her husband Joe Overstreet (an African American artist who died in 2019). The gallery has a history of exhibiting African American and non-mainstream artists, and the two proprietors were leading figures in the East Village art scene for many years with strong ties to local artists. Kathy Creutzburg, who installed Wave, a blue steelpipe sculpture inspired by Hokusai's iconic woodblock print, recalls that she "created that piece a few years ago for exhibition on Governors Island. Then, Corrine took on [her] sculpture when [she] was running out of options for where it could be." Some of the sculptures are installed permanently and some temporarily, but the works on view seem to have accumulated from the garden's opening in 1980 to the present day. It appears to the eye as a series of layers. After standing in the sculpture garden for a while, it suddenly occurs to me: Is it possible to listen to those layers of memory, too?

21. Albert's Garden

Nestled quietly on East 2nd Street, Albert's Garden feels like a hidden oasis in a crowded city. When I visit, a young woman wearing a mask sits on a bench reading for several hours, while an older woman in a wheelchair sits completely still in meditation. The silence, which seems to beckon the visitor to meditate, is broken by the sound of wild birds splashing in a small birdbath from time to time ... This garden dates back to 1971-72, making it one of the oldest in the area, The founder, Albert O. Eisenlau, Jr., who lived on this street (He was also involved in the Liz Christy Garden.) removed the asphalt from a disused basketball court, together with early members Ben Wohlburg and Louise Kruger, and began gardening there. Albert provided the trees, such as White Locust, Mulberry, Rose of Sharon, and the Red Bud. Louise provided the rose bushes and the hydrangeas. Initially the garden had dirt paths. But Louise, who was a sculptor, covered the paths with wood chips from her sculpture carvings. The fish pond was said to be installed around 1980. Over the course of ts half century, the garden was on the verge of being auctioned by city authorities several times, but each time it managed to avoid this fate. In 1998, when Mayor Rudy Giuliani tried to auction off many community gardens, this garden was purchased by the Trust for Public Land (TPL) along with sixty one others, and it finally earned permanently protected status. Maybe that's why a sense of relief seems to pervade the place From the back of the garden I hear what sounds like insects. I go back there to search for the source of the sound, but I'm unable to locate it. A long-time member, E. Jay Sims, is nearby and tells me it's the whirring of air conditioners in the building behind the garden. This brings home the fact that this environment is "urban nature," an approximation of the natural world but not quite the same thing.

I visit Le Petit Versailles after sundown and see an installation, In The Realm of Anansi From Assisi, by Peter Cramer, one half of the duo who runs the garden. In the spring of 2020, props and sets from Generator: Pestilence Part 1, a theatrical production directed by his partner, Jack Waters, at the downtown theater La MaMa, were reconfigured in the garden. Entering the gate on East 2nd Street, I encounter a dozen of gaudy, burlesque-style objects, orange ropes stretched like spider webs between buildings, and a sign reading THE VIRUS IS US. MASK UP! entwined with the garden's trees and plants. Eerie, meditative music that the two of them improvised with collaborators John Swartz and Mike Cacciatore, of the band NYOBS, emanates from speakers, and there is a whispering sound of them brushing against overgrown tree branches as viewers walk along the path, while the noise of cars going up and down Houston Street comes to sound like the ebb and flow of waves ... Peter and Jack have been active on the downtown scene since the early '80s, at one time running ABC No Rio, an alternative space on the LES. They have also been leading figures in the city's queer community and have connections with the legendary East Village club The Pyramid. Underlying their activities is a commitment to activism, to "art as a social tool and not a commodity." Peter told me, "We moved to the apartment next to the garden here on 2nd Street in 1985. In the mid-'90s, Mayor Giuliani removed an illegal chop shop (where stolen cars are dismantled and their parts sold) and fenced the empty lot in. Then we applied to the community board since the NYC Department of Housing Preservation and Development (HPD) had no plan to use this site. We got it in '95 through the GreenThumb program. We started doing an arts program but not really full time until 2000/2001 when we got some funding and made it an art garden. Usually we only showcase other artists and don't present our own work here, but it's difficult right now because of COVID and we thought it would be interesting to show In The Realm of Anansi From Assisi since the piece deals with viruses." On the sidewalk outside the garden, friends and artists living in the neighborhood have gathered, their voices echoing in the street. Clearly there is a place for gardens like this one, which plays the role of an art space or nightclub.

23. Liz Christy Community Garden ast Houston Street between Second Avenue and Bowers

This renowned garden stretches, long and narrow, along Houston Street between the Bowery and Second Avenue. In 1973, Liz Christy and a group of like-minded gardening activists known as the Green Guerrillas took over a fenced-in vacant lot, and converted the abandoned land buried in trash and rubble into an oasis for gardening. This was the dawn of the community garden movement, and even today the garden has the aura of a sacred site ... It's now sandwiched, however, between a huge condominium building next door and a Whole Foods across Houston Street, and there is something symbolic about its presence, like a last bastion amid ravening charges of capitalism. Donald Loggins, who has been involved in managing the garden since the beginning, welcomes me in and we stroll around for a while. There are hundreds of varieties of plants, cobblestone and gravel-covered paths, and two small ponds, all woven into a delicate tapestry of impeccable beauty. This too seems to put a certain distance between the garden today and its roots in underground activism. It's surrounded on three sides by large, busy streets, and by all rights, the traffic noise should be horrendous, but on an early summer day, the trees are lush and act as a filter and protective barrier. It is surprisingly quiet. Donald tells me an interesting fact: "One reason we haven't been evicted from this site is that there's a subway station right below us. They couldn't build a building here if they wanted to." It is a protected place in more ways than one.

Like many others, this garden on the corner of Stanton Street and Norfolk Street on the Lower East

24. Children's Magical Garden

Side has been frozen in time since the lockdown began. On a late summer day, member George Hirose opens the gates for me. There are huge colorful, utopian murals painted on sheets of canvas, children's playground equipment, oval huts resembling spaceships. He tells me that in designing this garden "there was a lot of emphasis on children," partly because the site is located between three schools. Now, however, schools are closed, and children's happy voices are silent for the time being, except for those of the members who tend the garden. The garden's fence faces onto two streets, and I can hear the chatter of passersby, booming bass from car speakers, cars on nearby Essex Street ... a rainbow of ambient urban sound. I notice that there is another fence, dividing the garden grounds in two. George tells me, "This side is managed and protected by the Children's Magical Garden organization through GreenThumb, but on the other side developers are demanding rights they don't have, and the case is still in court." According to the Garden's lawsuit, real estate investors, recognizing the value of this land cultivated for decades by the Children's Magical Garden, tried to force them off their land to build private condominiums. The story of the garden begins in 1982 when garden founders cleaned up the lot, which was then heaped with rubble, frequented by drug dealers and buyers, full of garbage, and abandoned for over a decade. Considering its history, it's terrible to think this could be taken away. In 2014, garden advocates brought the case to court with the support of local residents, nearby schools, and other gardens. Four years later, over the developers' objections, their ownership claim was upheld by the New York Supreme Court, but the legal battle has not yet been resolved. "This place had been abandoned and nobody cared about the land. This neighborhood used to be filled with crime and kids had no place to play. There was activism propelled by the community. Then, decades later, developers try to take the garden away. And, we say 'No!'"

Texts: Aki Onda Translation: Colin Smith Design: Tadao Kawamura Produced by Arts Maebashi for "Listening: Resonant Worlds", December 12, 2020 - March 21, 2021